

シンクロダンスが、障害児者・援助者相互に及ぼす影響

～主に知的障害・自閉症スペクトラム（ASD）における 他者との対人相互関係の特徴と変化の視点から～

会津大学短期大学部 幼児教育学科
市川 和彦

I. 研究の背景と先行研究

1. 研究の背景～虐待の積極的予防法としてのシンクロダンス～

筆者のライフワークである施設内における虐待予防について考察する中で、筆者は「包括的予防法」が有効であると考えに至った。包括的予防法は次の二つのレベルに分けられる。

- ①消極的予防法：不適切な関わり（虐待）とは何かを知る。
- ②積極的予防：適切な関わりとは何かを知る。虐待のない風土をつくる。

特に②が重要であるが、さらに少し詳しく述べると、利用者と共に居る、共に楽しい時間を持つ、利用者・援助者ともに笑顔が増えることだと筆者は考えている。つまり、「～しない、してはいけない」（叩かない、怒鳴らない、急かさない、引きずらない、無視しない、睨まない、腕組みしない）といった“引き算の発想”ではなく、「～したい、～しよう」（触れよう、褒めよう、ゆっくりつきあおう、一緒に楽しもう、笑顔で関わろう、同じ目線で見つめよう）といった“足し算の発想”である。“足し算の発想”を具体化したものの一つが「シンクロダンス」である。研究の背景には一つには施設内における利用児者と援助者の豊かな対人関係を促進するものとしてダンスを活用できないかといった筆者の仮説がある。

1.2 利用児者が自発的に楽しめる活動

特に年齢の若い利用者には時代に即したクール（cool）な動き（かっこよさ）が求められている。ここ数年に登場してきたボーカル・ダンスユニットの人気やヒップホップ等のストリートダンスへの人気は時代的背景として挙げられる。2002年の牧野アンナらによるダウン症児者によるダンスユニット「ラヴジャンクス」が火付け役となり、それ以後、ASD児者を含め、障害児者を対象としたダンススクールが多く開校されている。

クールさは、オフビートの拍に乗る「乗り（groove）」がなければ表現されない。強い拍（ダウンビート）が裏（オフビート）でシンコペーションを多用したリズムに乗ること、

拍にヒットして乗ることがクールと感じる要素の一つと言える。某障害者施設の職員に利用者が好む曲は何かと聞いたところ「AKB48」との返事が返ってきた（一昔前では演歌が多かったが）。流行の曲には洋楽・邦楽を問わずに上記で述べたクールでファンキィなリズムの曲が多いので、幼児でも、おとな以上に身体でリズムを簡単に受け入れることができる。障害があるからといってお遊戯レベルのダンスで良いということはない。選曲が非常に重要である。利用児者が、その曲を聞いただけで踊りだしたくなるような曲で踊ってほしいとの思いが本研究の背景にはある。本人が納得し、出来たときにある程度の達成感を感じられるレベルのダンスを踊ってほしい。しかし、ほとんど反復（繰り返し）の無いヒップホップダンスやジャズダンスを一曲踊りきるには、相当多数のステップをマスターしていることと、さうとうの記憶力が求められる。知的障害や ASD 児者には至難の業である。むしろパターンの繰り返しの多いエアロビックのほうが適しているといえよう。しかし、ある程度見せることを目的としたヒップホップに比べ、体力維持や向上を目的としたエアロビックは若干クールさに欠ける。よって、ヒップホップのステップを基本として同じ動きを一定回数（たとえば8小節）繰り返す「ダンスビック」（筆者が名づけたヒップホップとエアロビックを融合したダンスの造語である）が適していると思われる。

また、いずれの「シンクロダンス」においても身体接触を含むものと、含まないものに分けられるが、ダンスにおいても他者との身体接触を含めることは重要である。他者との関わりの構築、改善、維持を目的とした場合、特に言語によるコミュニケーションが困難な対象者の場合、「触れる関わり」は「つながる喜び」をもたらすなど、人の感情に何らかの影響を与えるホルモンであるオキシトシン¹⁾の働きを促進し、身体を通して相手の温かさ、自分に向けられた関心、慰め、愛情を感じ取ることができる。

また、モベリ (Moberg 2000 邦訳書 2008)らによるスキンシップとオキシトシンによる人と人との感情的絆の形成に関する研究、あるいはエクササイズ（身体運動）や一定のリズム（反復刺激）とオキシトシン放出に関する研究がある。さらに音楽や歌唱がオキシトシン放出に効果があるとの仮説も希少ではあるが存在するが (Takahashi 2013 邦訳書 2014)、ダンスとオキシトシンとの関係について言及した研究は見当たらない。筆者はオキシトシンの効果について生理学的に検証することは不可能であるが、ダンスがオキシトシン放出に何らかの影響があるとの仮説を抱いている。

以上述べた「シンクロダンス」の有効性と、利用児者が楽しめるツールとしてのヒップホップダンスに代表される現代的リズム音楽による「シンクロダンス」による集団セッションである「ダンスビック・ワークショップ」の、対人関係改善に果たす役割、有効性の実証が本研究の背景にある。

2. 先行研究

2.1 シンクロダンスを構成する概念

次に障害児者における「シンクロダンス」に関する先行研究について整理してみる。

「シンクロダンス」を構成する概念としては①シンクロ（模倣）すること、②「触れる」こと、③「揺らす」「揺れる」こと、④ダンスによる治療・教育、があげられる。まず概念の①②③に関する先行研究をレビューした後に④の障害児者を対象としたダンスによる治療・教育に関する先行研究をレビューする。

「シンクロダンス」の名称を用いて動きのシンクロに特化したダンスの形態を扱った研究、ヒップホップなどの「現代的なリズムのダンス」を用いたダンス・セラピー、ダンス・ムーブメントに関する研究は見当たらない。よって、先行研究領域としては、主に精神障害者を対象とした「ダンスセラピー」、知的障害・ASD等の発達障害を対象とした「ダンス・ムーブメント」が対象となる。

2.1.1 シンクロ（模倣）すること

スターン (Stern 1985)の言う乳児と母親との原始的なコミュニケーション手段である模倣を「情動調律 (affect attunement)」と呼び、調律を行う最大の理由は利用者と「共にありたい」「時間や感情を共有したい」「その行動に参加したい」「仲間に入りたい」との思いであると解釈しスターンは、それを「対人コミュニケーション (interpersonal communion)」(Stern 邦訳書 1989:173)と呼んだ。

オゴーマンは以下のように述べ、ASD児に関わる際の模倣について薦めている。

「たとえば、体をゆすることが目立った行動で、しかもそればかりしている自閉症児がいる。他のすべての試みが失敗したら、子どもと一緒に体をもゆすってみなければならない。(略) おとなはしばらくの間、注意深く子どもの様子を観察し、子どもを驚かしたり乱暴過ぎるようなことはおしつけずに、終始子どもと活動をともにすべきである」(O.Gorman 邦訳書 1970:204)

ローマン、ハルトマンは次のような事例を紹介している。

「クラウディアは、スプーンを即座に投げ、再びなぐり始めた。治療者もスプーンを投げ、足でどんと床を踏みつけた(介入：別の方向に注意を向けること、多くの行動の連鎖と模倣をする)。クラウディアはびっくりして、再びスプーンを床に投げつけ、少し自分をなぐった。治療者は、自分のスプーンを取り、ゆっくり大きな声で「エヘン」といいながら、さらに1さじのヨーグルトを食べた(介入：別の方向に注意を向け、治療者がモデルを示す)。クラウディアは、少しなぐる行為を示したが、

治療者のところに近づいてきた」(Rohman & Hartmann 邦訳書 1998:86)。

自傷行為を繰り返すクラウディアに、まず治療者に注意を向けさせたのは治療者の模倣だった。ローマンとハルトマンは自傷行為を彼らの呈するコミュニケーション手段と理解し、交流の手段として、まず、「子供の行動をゆっくりと、極端に模倣」する方法を挙げて

いる (Rohman & Hartmann 邦訳書 1998:87)。「子どもが自傷行動以外に一人で何かに従事したり、遊んでいるとき、これらの行動のなかに注意深く入り込み、子どもが他の人と一緒に遊ぶよう指導をする。(略)最初に子どもに何らかの行動を要求するのではなくて、子どもの行動に従う(子どもの行動を模倣する)」(Rohman & Hartmann 邦訳書 1998:84-87)と、自傷行為を呈する ASD 児者への治療について援助者が模倣することの重要性について述べている。

ティンバーゲンは ASD 児には特に遊び的雰囲気が必要であるとした上で次のような事例を紹介している。

「ユトレヒト大学の N.L.J・カンブ教授はある時われわれに、音楽が聞こえるとからだをゆすり始める(といってもごく単調に、踊る熊のように機会的に動くのである。(中略)女の子に(うしろから手でその子を支えながらついて歩いて)はじめはその動きにごくわずかな変化を加え、その程度をしだいに増していくことによって、その子の「常同行動」を少しずつ着実に変化させ、ついには創作的舞踏に変えていくという見事な実演のフィルムをみせてくれた。このダンスはその後、ひとつの遊びになっていき、子どもも明らかにそれを楽しむようになった」(Tinbergen and Tinbergen 邦訳書 1987:291)

山田(1989,A)は、ASD 児者の人との関わりを育てる方法として「身体動作の模倣、リズムック、手遊び歌などの模倣動作を十分に行います。模倣は、相手を意識するきっかけにもなり、コミュニケーションの形成に大きな役割を果たします」と模倣の持つ意味について述べている。

さらに山田(1989,B)は一緒にいると楽しい関係から他者と関わりたいという欲求が育つとしている。その具体的方法として相手の動作を模倣する「まねっこ遊び」の有効性について述べている。

イアコボーニは、他者の言動を模倣する機能を持つミラーニューロンの機能低下が ASD の中心的障害であり、「模倣にもとづいた何らかの治療法が社会的困難を抱える自閉症患者を助けるのに非常に有効」であるとの仮説を提唱している (Iacoboni,Marco 邦訳書 2011:219)。

イアコボーニは著書の中で、自閉症患者の治療をしているという男性の印象深い言葉を紹介している。

「何をやっても失敗したとき、私には最後手段があります。それは、たいていうまくいくんです。私の患者のほとんどは、反復的な定型化した動きをします。どうしても通じあえなくて、もうどうしたらいいかわからなくなると、私はその定型化した動きを真似するんです。するとほとんど即座に私を見るので、そこでようやく私たちのあいだに相互作用が生まれ、私は患者の治療が始められるわけです(Iacoboni 邦訳書 2011:220-221)」。

援助者が利用者の行動を模倣することで共感の細胞であるミラーニューロンを活性化することが可能である。

イacoboniも著書で紹介しているが、フィールド&ネーデルらは ASD 児を対象とした興味深い実験結果を紹介している。ソファ、椅子、玩具、などいずれも 2 つ用意された部屋で、あるグループは、他人である大人が子どもの行動を模倣し、別のグループは、他人である大人が、特に子どもの行動を模倣することなく遊ぶ実験を行った。その結果、子どもの行動を模倣したグループの子どもには、大人に視線を向ける、表情が出る、近づく、触れるといった大人との相互的な関わり等が見られた (Field., Sander and Nadal 2001)。この相互的な関わり (相互作用としての模倣) が出現したことが特記すべきことで、利用児者が援助者の動きを模倣することができる段階に至ったわけである。これは相手の動きにミラーリングしようとする能動的行動である。やがて人と人を情動的に通じ合わせる「社会的ミラーリング」を獲得させ、その結果、人と人とかかわる「社会的コミュニケーション」が生まれたわけである (Iacoboni 2011:222)。

模倣は多種多様な動きを獲得するために必要であるにとどまらず、相手の気持ちに共感するところを育てるための礎石である。模倣されることを通して子どもは自分の存在が他者に受け止められていること、自分に関心を寄せてくれる他者がいることを実感するのである (小林・大橋・飯村 2014:114-122)。

2.1.2 「触れる」こと

ASD 児とセラピストの手の触れ合いによるセッションがやがて双方の信頼感を育て「完全な触れ合いが生まれる」(Alvin,J 邦訳書 1982:33)と述べたアルバンは、まったくコミュニケーションが取れなかった自閉症児が、子どもの両手をとって音楽に合わせて動く(踊る)などのセッションを続けた結果、やがて何人かの子が、朝、アルバンの姿を見つけると子どものほうから手を差し伸べてくれるように変化したとささやかながら感動的なエピソードを紹介している (Alvin,J 邦訳書 1982:34)。アルバンは音楽療法の領域において多くの臨床経験から優れた音楽療法を構築したが、彼女の実践では音楽に伴っての子どもへの身体接触が多く用いられている。彼女は次のようにまとめている。「身体的接触は、手と手を取り合うこと、およびそれと結びついた動作によって行われた。(略)音楽と体の運動とによって作り出された雰囲気または環境の中で、子どもたちは、こうした感情に気づき、そして、うまく処理できるようになっていったように思われる。(略)音楽に合わせて体を動かす楽しさをおぼえた自閉症の子らは、男の子でも女の子でも、お互いに人間的な関係がもてるようになっていった。この活動は、お互いに自閉症というハンディキャップのほかにはほとんど共通点のなかった子どもたちにとって、ひとつの社会化の経験となったのである」(Alvin,J 邦訳書 1982:59)。

前述したアルバンとの ASD 児との例から、身体接触が対人関係能力を育てる何らかの効果的きっかけになっていることがわかる。

モンタギューは次のように身体接触の効果について述べている。「ぴったりとした感触と、抱いている人の身体の動きによるリズムカルな触覚への刺激は、軽くたたいたり、撫でたり、抱きしめたりされることによって、手やその他の身体から子どもに与えられる。それは安らぎや慰めや安心感をもたらすのである (Montagu 邦訳書 1977:121)」。

2.1.3) 「揺らす」「揺れる」こと

その他の身体から子どもに与えられる刺激としてモンタギューは「揺する」を挙げている。しかし残念なことに 1980～90 年代、子どもを甘やかすことが子どもの諸問題の原因とする説が流布され、その攻撃的となったのが「揺りかご」であった。取って代わったのが柵付きの檻のような小児ベッドであった。揺らさないと眠らない、揺らすことは甘やかすことといった誤った考えにモンタギューは次のように反論する。「子どもたちは、ベビー服を脱ぐように揺りかごから離脱するのだ (Montagu 邦訳書 1977:130)」。

ロッキングチェアも揺りかご同様の迫害を受けたが、やがてロッキングチェアがいくつかの病院で見直されるようになる²⁾。

ASD 児者はなぜ身体を揺らすのか。本来は他者から与えられる受動的刺激を得ることができない場合にその代替としての自ら行う代替的行動であると言えよう (Montagu 邦訳書 1977:136)。

「揺らす」よりも少々激しい動きに「揺さぶり」がある。河添は生後 6 ヶ月から 9 ヶ月を「揺さぶり遊び期」と名づけ、おとなの胸に横抱きにされて揺さぶられたり「高い高いパー」に代表されるようなダイナミックなおとなの遊びが、その後の乳児の発達に大切であると説いている (河添 1978 :64-65)。「はじめに」で紹介した A と筆者のセッションにおいても、ときには激しく両手をスイングしたりストレッチすることで実に楽しそうな表情を見せてくれたことがあった。やはり静と動のリズムに身を任せることが快いのだろう。

ロッキングが長期にわたって感覚を発達させる環境が奪われたことによる神経組織の障害による行動であると説くのは、自らも ASD である動物行動学者のグランディンである (Gradin 邦訳書 1997:109)。また、彼女はハーローの実験を紹介している。母親から引き離された小猿が ASD 児者に良く見られるような異常行動を呈していたが、木馬やロッキングチェアのようなロッキングを与えたところ異常行動が沈静した (Gradin 邦訳書 1997:107)。

モンタギューは「揺られる」ことの効果を下のようにまとめている。

- ① 脈拍を強め、血液の循環を助ける。
- ② 呼吸を強め、肺の充血を防ぐ。
- ③ 皮膚の活動を刺激する。
- ④ 連帯感を保つ (一人ではないことを実感する)
- ⑤ 全体的な細胞や内臓に刺激を与える。

- ⑥ 胃腸の発達を促進する。
- ⑦ 腸全体を刺激し、消化・吸収を助ける。

(Montagu 邦訳書 1977:130-131)

筆者が、特に一定のリズムで「揺らす」「揺れる」ことを強調するのは、それが「シンクロダンス」の各技法に共通している重要な動きであると認識するからである。身体接触を伴う「シンクロダンス」は一定のリズムに乗って行われる。身体接触を伴う「シンクロダンス」が、やがて触れ手から独立して、たとえば援助者と向かい合っただんす（触れないダンス）に移行した場合でも並行ダンスは快さを与えてくれる。なぜなら、上下左右の揺れの動作（アップ・ダウン）を基本としているからである。

2.1.4 ダンスによる治療・教育

崎山（2007:41-65）の著書からダンスセラピー研究の沿革について見てみよう。

ダンスセラピーの基礎を築いたのはチェイス（1896～1970）であるが、彼女のフィールドは精神病院における精神障害者への実践が中心であった。ダンスが対人関係に良い影響を与える心理療法としても有効であることを実証した。彼女は比較的タッチングをセラピーに積極的に取り入れ、ローズの事例においてはメンバー同士がお互いの背中に触れるセッションを行い、そのなかでセラピストが背中に触れる穏やかな行為を繰り返すことでローズとの穏やかな関係を構築していった実践を報告している。

アドラーの影響を受けたエヴァン（1909～1982）とエスペナーク（1905～1988）は身体的機能訓練のみではなく心理的アプローチとしてのダンスを展開した。ホワイトハウス（1911～1979）はユング心理学の影響から内的イメージを映し出す「能動的創造（Active Imagination）」を育むオーセンティックムーブメント（Authentic Movement）をダンスの主な活動とした。

シュープ（1903～1999）は“触れる”行為、タッチングについても若干触れているが、タッチングはグループとして自然発生的に動きを共有し超自然体験（Ur 体験）に導くものであるとする。シュープの著書を翻訳した平井によれば、動きと感情は結びついており手をつないだり腕を組んで動きをすることで人は“快”を体験すると述べている。シーゲル（1984）は積極的にではないがタッチングは母子関係の再構築につながるという理由からダンスセッションにタッチングを用いている。

以上は精神障害者を対象としたダンスセラピーであり、知的障害児者、発達障害児者を対象としたものではない。

障害児者を対象としたものとしてはレコフ（lefc0 1974 邦訳書 1994:170-173）の著書の付録に「京都府下A学園におけるダンス・ムーブメントセラピー」と題する知的障害者更生施設における実践例が紹介されているが、このなかで「シンクロダンス」と同様のものと思われる行為が「ミラーリング」という言葉で紹介されている。

野田（野田 2009）は音楽に合わせて例えばトランポリンを用いてリハビリテーション

を行う「音楽運動療法」のメソッドを用いて ASD 児や重度脳障害児とのセッションを紹介している。

別の流れとしてはフロスティック（Frostig 1976）によって体系化され障害児を主な対象とした「ダンス・ムーブメント」の流れがある。

モンテッソーリのメソッドと作業療法の技術を生かして感覚—運動法による脳障害児の治療教育法を構築したフロスティックは、ムーブメントは子ども自身の主体的活動として展開され、創造性の刺激、快さ、喜びを伴うものでなければならないとした（Frostig 1970 邦訳書 2007 p.125-155.）。また、二人一組や集団による活動が社会意識を醸成するのに効果があり、ダンスムーブメントにおいても重要な要素であるとしている（Frostig 1970 邦訳書 2007 p.135）。

大橋（大橋 2002:52）は ASD 児を対象としたダンス・ムーブメントプログラムに関しての研究を行い。計 24 回のセッションの結果、①信頼関係の構築、②情動調律、③模倣遊びへの展開、のレベルにおいて効果が見られたと報告している。また、情動的交流の増加に伴って強い快の衝動が攻撃的行動となり現れた事象が記されている。

狐塚・茅野（2008）は ASD 児者への 4 回のセッションでの事例研究を行って、身体表現的な関わり、身体接触を意識した関わりが ASD 児のコミュニケーション形成に有効であると述べている。

さらに茅野（2012:184）は知的障害児を対象としたダンス・プログラムによる実践を行い、選曲の重要なことや友達や教師とのふれあいのときに、子どもたちにプラス表情が多く見られることからダンス・プログラムが「コミュニケーション能力の向上や人間関係の形成につながる」と述べている。

伊藤（2014:38）は自らが関わる知的障害者とその母親で構成されるダンスグループへの半構造化インタビュー調査の分析からダンスグループの活動が、「家族や他者とのコミュニケーション」を増やしていること、母親が「グループの活動や運営を通じて、自分自身が変わったことやグループの仲間との強さを強く感じている」などの効果があることを紹介している。

II. 研究の目的と方法

1 研究の目的

前章で見てきたように、ダンスセラピーが主に精神障害者を対象にしてきたのに対し知的障害・ASD 児者は主にムーブメント教育の領域で扱われてきた。しかしながら現代的リズムによるダンス（ヒップホップ等）をツールとして対人関係能力の発達、改善について論究した研究は見当たらない。また、その目的として虐待防止のための包括的予防法としてダンスを扱った研究は筆者が知る限り存在しない。

本研究では「シンクロダンス」（ダンスムーブメント）が利用児者と援助者の対人関係にどのような変化をもたらすのかを明らかにすることを目的に、ビジュアル・データ分析とインタビュー調査を実施した。その研究結果をもとに利用児者と援助者の対人関係の改善にはどのような活用方法があるのか、援助者やスタッフに求められる関わり方はいかなるものか、援助者に快さや喜びをもたらすプログラムとはいかなるものかを明らかにし、ダンスによる「虐待のない安心できる風土」構築の可能性について考察する。

2 研究方法

研究方法としてはダンスビック・ワークショップ活動中における筆者ら³⁾の参与観察に加え、筆者が撮影した動画によるビジュアル・データの分析に加えて、6名の援助者からの半構造化インタビュー法によって得た語り进行分析する質的研究(エスノグラフィー研究)法を用いた (Creswell 2003 邦訳書 2007) (小田 2010)。

2.1 実施施設での録画によるビジュアル・データの分析

研究方法はワークショップ活動中における筆者の参与観察に加え、筆者が撮影した動画（主に定点カメラによる撮影で、ほぼ会場全体が撮影できるようにした（図1、2））によるビジュアルデータの分析・考察を中心としたエスノグラフィー研究法による。動画撮影については施設長にデータの使用目的について説明し、同意書を受理した。施設長への誓約書においては動画の用途は以下の3点に限る旨明記、説明した。「① チームのメンバーが実践した内容の振り返り（反省）をするため。② ゼミにおいて学生にダンスビックの紹介をするため。③ 本活動に関する実践報告、論文等執筆の際、必要に応じて事例として記述するため。この場合、動画をそのまま資料として映写、または写真として掲載することはせず、施設名、参加者の実名は伏せ、エピソード記述としてのみ記載する。」さらに、動画・記載した文章の確認は常時可能であり、データの処分を求めることができ、目の前で処分するなどの確認をすることができる旨を明記した。

・ 実施施設の概要と実施日及び環境

施設 A：障害児入所施設

参加人数：およそ 20 人

実施日：第 1 回 2016 年 7 月 10 日（日）

第 2 回 2016 年 8 月 21 日（日）

第 3 回 2016 年 9 月 11 日（日）

第 4 回 2016 年 10 月 2 日（日）

第 5 回 2016 年 10 月 29 日（土）

施設 B：障害者支援施設（入所）

参加人数：およそ 20 人

実施日：第 1 回 2016 年 7 月 10 日（日）

第 2 回 2016 年 8 月 21 日（日）

第 3 回 2016 年 9 月 11 日（日）

第 4 回 2016 年 10 月 2 日（日）

第 5 回 2016 年 10 月 29 日（土）

施設 C：障害者支援施設（入所）

参加人数：およそ 20 人

実施日：第 1 回 2016 年 5 月 22 日（日）

第 2 回 2016 年 6 月 26 日（日）

第 3 回 2016 年 7 月 24 日（日）

第 4 回 2016 年 8 月 28 日（日）

第 5 回 2016 年 9 月 9 日（金）発表

第 6 回 2016 年 12 月 4 日（日）

施設 D：障害者支援施設（入所）

参加人数：およそ 30 人

第 1 回 2014 年 11 月 1 日（土）

第 2 回 2015 年 12 月 19 日（土）

第 3 回 2016 年 11 月 27 日（日）

施設 A と施設 B は同時に同じ場所で開催している。

時間はいずれも 60 分で、内容はおよそ p.13 に示した通りである。

実施会場の配置は以下の通りである。

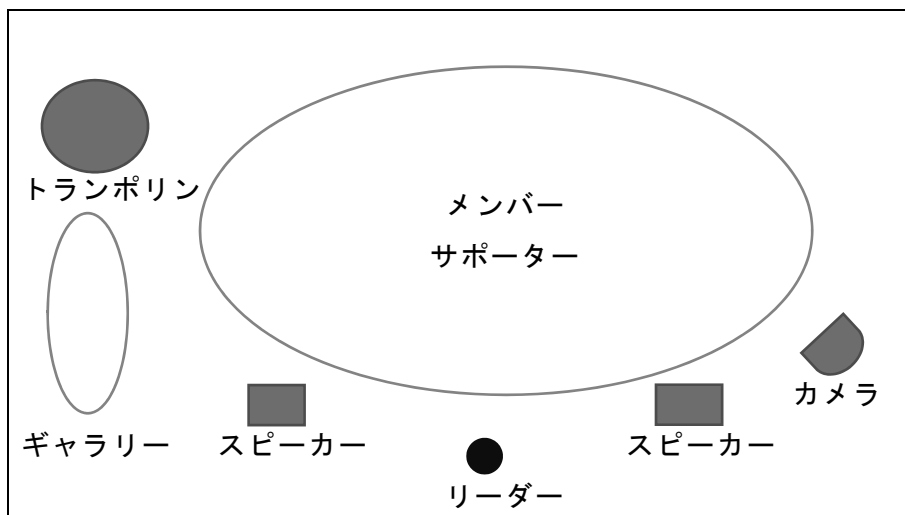


図1 施設A 施設Bでの会場配置（体育館）

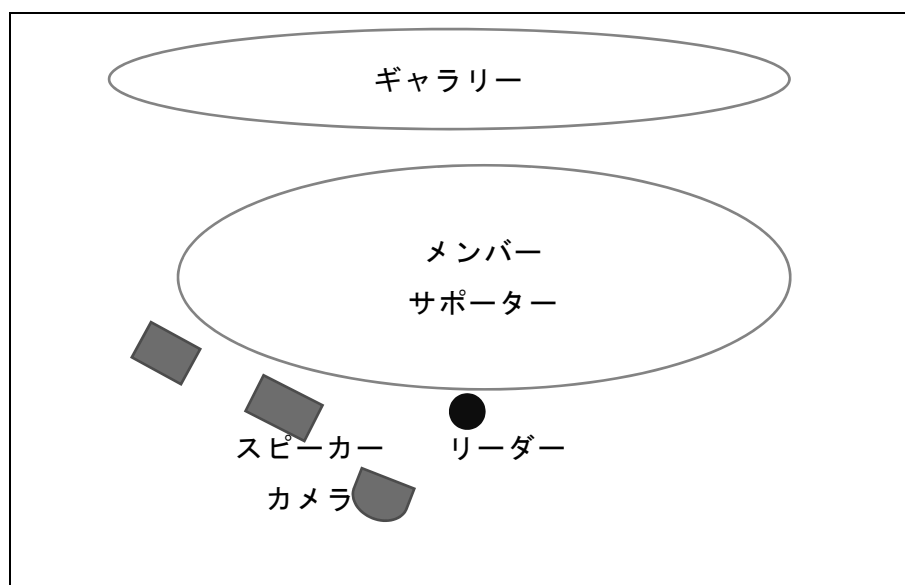


図2 施設C（食堂）、施設D（ホール）での会場配置

2.2. インタビュー調査

インタビューに関しては、依頼状にインタビュー内容、録音データの用途は以下に限る旨を明記するとともに施設長に説明し同意書を受理した。「① チームのメンバーが実践した内容の振り返り（反省）をするため。 ② 今後の活動計画を立てるうえでの参考にさせていただくため。③ 本活動に関する実践報告、論文等執筆の際、必要に応じて事例として記述するため。この場合、施設名、参加者の実名は伏せ、インタビュー内容の記述を掲載します。その際、特定の施設、利用児者が特定されるような記述は避ける。」また、記載した文章の確認は常時可能であり、録音データの処分を求めることができ、目の前で処分するなどの確認をすることが

できる旨を明記した。

調査実施日と協力者は以下の通りである。

・調査実施日

A 障害児施設、B 障害者支援施設それぞれ 1 名 (12/3)、C 障害者支援施設の 3 名の援助者 (12/4)、D 障害者支援施設の 1 名の援助者 (12/29) に半構造化はインタビューを行った (12/4)。

・調査協力者の概要は以下のとおりである。

2016 年 12 月 3 日 (90m)

A : A 施設、保育士 (ダンスビック担当)、男性、20 歳代、経験年数 11 年

B : B 施設、支援員、男性、30 歳代、経験年数

2016 年 12 月 4 日 (60m)

C : C 施設、支援員 (ダンスビック担当)、女性、20 歳代、経験年数 2 年

D : C 施設、支援員、女性、20 歳代、経験年数 2 年

E : C 施設、支援員、女性、20 歳代、経験年数 3 年

2016 年 12 月 29 日 (90m)

F : D 施設、支援員 (ダンスビック担当)、女性、20 歳代、経験年数 4 年

主な質問は以下の通りである。①ダンスビック・ワークショップをはじめて利用児者、援助者に何か変化は見られたか。②ダンスビック・ワークショップの直前と直後の利用児者の様子について。③援助者はダンスビック・ワークショップをどのように受け止めているか。④今後の活動に、なにか要望はあるかなど。事前に文書で ICレコーダーによる録音の許可を求め同意を得たうえで行った。インタビューは必要に応じてビジュアル・データを観ながら行った。

2.3 ダンスビック・ワークショップの内容

2.3.1 「集団セッション」(ダンスビック・ワークショップ) の実際

枠内は筆者らが実施しているダンスビック・ワークショップの内容である (所要時間約 60 分)。

プログラム

- ① ストレッチ (5分)
- ② (できる方がいれば) アイソレーション～首、胸、腰、膝～ (5分)
- ③ 筋トレ～腹筋、腕立て～ (5分)
リラックス (5分)
- ④ ステップ練習 (15分) ～ダウン&アップ、サイドステップ、ボックス、ランニングマン、ポップコーン等～
- ⑤ 振り付け～ステップの組み合わせ～ (10分)
リラックス (5分)
- ⑥ 集団セッション (触れる、または触れないダンス) ～スウィング、ストレッチ、ハイタッチ
ロッキング、ジャンピングなど～ (8分)
- ⑦ クールダウン (2分)

ダンサー (学生) *は予め決められた動き (振り付け) のきっかけ (prompting) を提供する役割で、利用児者は模倣できる部分だけを模倣する。サポーターはフロアに入り利用者の傍らで動きをリード・サポートする。

ワークショップにおけるスタッフの役割は以下の通りである。

*ダンスビック・ワークショップには次の役割がある。

メンバー：参加者

スタッフ

リーダー：全体を把握する。ダンスの主たるリーダー。

ダンサー：リーダーとともにダンスのリードをする。モデル (お手本)。

サポーター：おもにフロアでメンバーをフォローする。

さらに「並行ダンス (触れないダンス)」には個別 (1対1) で行うものと、チーム (集団) で実施するダンスがある (図3)。チームによるダンスは主に予め決められたリーダーの動き (振り付け) をメンバー全員が模倣するものである。その意味では利用児者には自発的ダンスより注意力、集中力、自己コントロール、忍耐力、知的理解と身体の協応、他者との協調性が求められ、対面ダンスより高度なスキルが求められることになる。



図3 並行ダンスの集団セッション

2.3.2 「触れるダンス」(個別セッション)におけるシンクロダンスの基本的技法「型」

ダンスビック・ワークショップでは、メンバー同士や援助者、スタッフと手をつなぐ、手を合わせる、ハイタッチをするなどの「触れる関わり」を積極的に盛り込んでいる。

ここで紹介する4つの技法は武道で言えば「型」に相当するもので、セッションのなかで様々なバリエーションに発展していくことがむしろ望ましい。

① スウィング

正面からゆっくり相手の両手を取り(グリップ)、リズムに合わせて上下、前後、左右に揺らす。(図4)

② ストレッチ

正面から相手の両手を取り(グリップ)、リズムに合わせて左右の腕を交互に伸ばしたり引いたりを繰り返す。(図5)



図4 スウィング



図5 ストレッチ

③ ロータッチ

正面から胸の高さで手のひらを合わせてみる。リズムに合わせて、徐々にクラップさせてみる。両手同時にクラップする方法と片手ずつ交互にクラップする方法がある。(図6) アルバンは向かい合っとうたいながら手のひらを合わせる「パタケーキ」(pat-a-cake)という関わりの技法がすばらしい効果をあげると述べている(Alvin,J 邦訳 1982:33)。

④ ハイタッチ

正面から肩より上の高さで手のひらを合わせてみる。リズムに合わせて、徐々にクラップ(手のひらをたたく)させてみる。両手同時にクラップする方法と片手ずつ交互にクラップする方法がある⁴⁾(図7)。

終了するときは援助者は「ありがとうございます。楽しかったですね」「元気が出ましたね」と利用者にお礼を言ってほしい。なかなか離れようとしないう利用者には「今日はおしまいです」とあっさり切り上げたほうが離れやすい。



図6 ロータッチ



図7 ハイタッチ



図8 ワイパー(手と手を合わせる)

2.3.3 「集団セッション」における「触れるダンス」の実際

集団の中で、複数のペアがそれぞれで行う方法と、二重の輪を作り互いに向かい合って行う「シンクロダンス」などがある（図9）。前述した「スウィング」「ストレッチ」「ハイタッチ」の他に、前後左右への「ジャンピング」、アップダウンなどの「ステップ」を組み入れ、「触れるダンス」「並行ダンス」両方を組み込んだ集団セッションを行った。触れられたくないメンバーもいることが考えられるので無理強いはいしない。

また、曲想はメジャーで明るく元気の出る「乗れる」ものが良いし、ほとんどのメンバーが知っていて、聞いたことがあり、口ずさめるものが理想だろう。



図9 集団セッション「WAになっておどろう」

Ⅲ. ビジュアル・データとインタビューから得られた結果の分析

1 ビジュアル・データから

以下に、主に利用児者同士、利用児者と援助者、利用児者とスタッフとの対人相互関係におけるエピソードを挙げてみる。

A障害児入所施設、B 障害者支援施設

場面1 (7/10) 初回ということもあってか、利用者は、緊張気味で立ったままじっとしている。

場面2 (7/10) ダンスの曲が鳴っている最中に利用者が勝手に歩き出すと援助者が追いかけてもとの位置に戻している。

場面3 (7/10) 車椅子のGさん（男性、40代）は、ほとんど身体を動かすことなく車椅子に座っているだけだが、その彼を会場の中央に移動させてくれる利用者がいる。

場面4 (7/10) 車椅子のHさん（男性20代）、両足や体全体を激しくバタバタさせ

ている。援助者に「嫌がっているのではないか」と確認すると。「楽しいときとかにバタバタするんです」とのこと。

場面 5 (8/21) 走り回る利用者を追いかけて、もとの位置に戻し、利用者の腕をとってリズムをとっている援助者がいる。

場面 6 (8/21) 休憩時間、A施設の子どもたちが5人、音楽に合わせておどっているところに車椅子に乗った**Gさん**が入ってくるが誰もかかわる人がいない。

場面 7 (8/21) 休憩時間、女子3人が輪になって音楽に合わせてリズムをとっている。

場面 8 (8/21) 床に座っている利用者を無理やり起こして立たせる実習生がいる。

場面 9 (9/11) : Iさん (男性、20歳代)。セッション中、床に座っている。援助者が常時付き添って話しかけるが動かない。自発的には動かないがその場にいることをいやがっている様子はない。セッションが終わった後、リーダーのところに来て立っている。まったく話のできない利用者だが、手を差し出すと握手をしてくれる。援助者が部屋に連れて行こうとすると抵抗して座ってしまう。

場面 10 (9/11) : A障害児入所施設、男性Eさん (10歳代)。最初の曲は終始立っているが、2曲目では動きに合わせてようと何度か手や足を動かし、クラップのときは連続で叩けるがリズムを取っていない。リズムを無視して形だけを模倣しようとしている。身体が若干固まっているよう。他の男性利用者が彼の前でふと立ち止まり、ダンスを促すように一瞬彼の手に触れる。

場面 11 (10/2) : Jさんは、床に座って動かない利用者に話しかけて一緒に踊るよう働きかける。

場面 12 (10/2) : 援助者から、利用者がダンスピックを楽しみにしてくれていて「今日はダンスの日なんだよー」と言って外に出て我々が到着するのを待っていてくれるとの話を聞く。

場面 13 (10/2) : 利用者が勝手に歩きだすと利用者のペースに合わせて傍らを付いていき、利用者が立ち止まるとそこで向かい合い、手をとってリズムをとる援助者がいる。

場面 14 (10/29) : 発表中に会場の利用者をステージに招くと何人も援助者が利用児者にステージ行くように促し、利用者と援助者が一緒に出てきて向き合っ

てスウィングをして踊る姿がみられた。
場面 15 (10/29) : 発表会。飛び入りした男性Kさん、最前列でサングラスを取り出し顔にかけると最前列で元気にフリースタイルで踊る。援助者によれば、普段は部屋でCDを聞いたりゲームに没頭していることが多く、あんなふう

に踊ったりする人ではないとのこと。

C 障害者支援施設

場面 16 (5/22) : 20 人くらい会場である食堂に集まるが実際に体をうごかすのは 10 人程度。

場面 17 (6/26) : 男性 L さん (20 歳代 : ASD)。セッションには毎回参加しているがセッション中は会場を徘徊しているが、メンバーが全員座ると一緒に座り一瞬動きを模倣しようとするがすぐにやめてしまい、また徘徊するか、ただ座っているかの状態になる。

場面 18 (7/24) : 女性利用者の M さん。動かないで立ち尽くしている男性利用者の後ろから動きをサポートしてくれる。

場面 19 (7/24) : 休憩時間に女性サポーターを囲んで話をしている男性利用者 3 人。女性サポーターと手をつないで話をしている女性利用者。

場面 20 (7/24) : N さん (男性、20 歳代)。今回初めての参加。最初は無表情で一点を見て固まっていたが、ダンスがはじまると少しずつ笑顔 (ニヤッ) が見えてきて、サポーターに腕をとられて腕を動かしている。急に走り出し男性サポーターのところに笑顔で走って行きハグする。

場面 21 (7/24) : 休憩時間に女性サポーターにハグする女性利用者。

場面 22 (7/24) : 休憩時間に女性援助者が女性利用者の背後に座り、後ろからハグしてリズムをとっている。

場面 23 (8/28) : 男性援助者、両側の男性利用者と両手で手をつないで音楽に合わせてステップしている。

場面 24 (8/28) : O さん (女性、10 歳代) 踊りの輪からはずれて立っている利用者をやさしく真ん中に連れて行く場面が見られた。

場面 25 (9/9) : P さん (男性、50 歳代)。発表会で曲に合わせてリーダーの動きとはちがう動きをしているが、まったく違うということでもなく、足の動きは合っている。発表会ときは自前の帽子をかぶって参加。サポーターに頻繁に話しかける姿が見られる。

場面 26 (9/9) : 発表会で聴覚に障害のある Q さん (女性、50 歳代)。ほぼまったく聞こえないが、曲が始まると両腕を上下させ力強く踊る。周囲の利用者の動きに合わせているよう。

場面 27 (12/4) : 「集団セッション」を行う。スタッフから一人の利用者に介入し、両手を取って「スウィング」「ストレッチ」などを行う。さらに 3 人、5 人と周りの利用者に広がり手をつなぎ輪になってスウィングする。利用者にも援助者、スタッフにもいつもより多くの笑顔が見られた。

D 障害者支援施設

場面 28 (11/27) : 年に一度のワークショップで、入所して3ヶ月のRさん（女性、10歳代後半）。AKBの「ヘビーローテーション」がかかると突然踊り出す。ステージに招くと走ってきてステージで踊っていたスタッフに混じって歌って踊る。それを見た支援者が驚く。普段は目立たなく、積極的にイベントに出たり、活動に参加する人ではないとのこと。

場面 29 (11/27) : ワorkshopはゴスペルライブの中間に設定されているが、車椅子を利用しているSさん（男性、40歳代）は車椅子に寄り添って隣に座っているダウン症のTさんの右手を演奏中やダンスビック・ワークショップ中、タッピングをしてリズムを取っている。Tさんはこれまでステージの前で元気に踊っていた方だが急激に体力が落ちたとのことで今回は座っていた。

場面 30 (11/27) 施設長が車椅子の利用者に付き添い、背後から手や腕を曲に合わせて動かしている姿が見られた。

2 インタビュー調査から

インタビューにおける語りから、対人関係の分析に有効と思われる語りを①「相互の関係」、②「楽しい場の共有」、③「見えなかった・気づかなかった部分への気づき」④「絆の連鎖」、⑤「賞賛と達成感」、⑥「般化と維持」、⑦「外との交流」の7つのカテゴリー（「」で表示）に分類し、特に分析の中心となる①においては、さらに『利用者・利用者の関係』『利用者・援助者の関係』『利用者・スタッフの関係』『援助者・援助者の関係』の4つのサブカテゴリー（『』で表示、サブカテゴリーからさらに下位概念が生じた場合は<>で表示）に分類した。

2.1 「相互の関係」

2.1.1 『利用者・利用者の関係』

a) 「車椅子の年配の方（Gさん）。子どもたちが休憩時間に踊っているときに自分で子どもたちのところに寄って行ってもだれもかかわらない。児童と成人は食事のときくらいですかね、一緒になるのは。席も別なので。Gさん、音楽のなってるほうに行っちゃうんです。音の近くにいきたいんです。支援者とは話すんですけど、やっぱり簡単な会話のみで一方通行な会話になっちゃうんです。だれもかかわらない。子どもたちも、もともと関わりがあまりないので関わっていいのかとまどっているのかもしれないね」（B施設Bさん）

b) Eさん。ASDで高1の方で、このときはじめての参加しました。ダンスは苦手だけどみんなが参加しているよって言うことで。リズムに乗るのが難しいのは観ててわかりますね。触れられるの苦手なんですよね。「やめて」ってなっちゃって。みんなが同じ動きでやりましょうということなら大丈夫とおもいますけど。」(A施設Aさん)

<向社会的行動>

a) 「(動画を見ながら) Gさんの車椅子押してくれているのは成人施設のかたです」(B施設Bさん)

b) 「(動画を見ながら車椅子のSさんが隣のTさんの右手をタッピングしてリズムをとっているのを見て) 彼の手をずっとたたいてんですよね。Sさんはアルコールなんかかっていう病気で最近、知的もはいつてきちゃって……。いつも仲はいいですよ。彼、周りに気をつかってるんですよ」(D施設Fさん)

2.1.2 『利用児者・援助者の関係』

a) 「参加しているのは全員ではない、希望者ですね。後は職員の推薦もあって、職員に「行ってきたら」といわれて、そういう方はここにくるとのりのりになりますね」(B施設Bさん)

b) 「パソコンが好きで勝手に押しちゃうので youtube とか見ようとして、それをとめるために職員が誘導します(ワークショップでは音源としてパソコンを使用している)」(A施設Aさん)

c) 「一番うしろのかたは前の人の髪の毛とかひっぱっちゃうんですよ。以前に実習生の髪の毛とか引っ張っちゃったりしてた方なんで、それが怖くて支援者が一緒についてるか、目を離さないでいるしかない。大学生が目の前にいてどうしようどうしようとおもってました。職員じゃなくて実習生とか若い方をたたいたりするので、にやにやしているところなくて。すごいですよ。髪の毛抜けちゃうくらい。今はだいぶ落ち着いてますけど1年前にもあったので」(B施設Bさん)

2.1.3 『利用児者・スタッフの関係』

a) 「今日もダンスの話し合いがあるよって言うと、ダンスってことばに反応して、みんなやりたくてむずむずして、早くボブさん(筆者のこと)に会いたいって言ってます。今日は話し合いだからね、って言って話してきたんですけど」(A施設Aさん)

b) 今日ダンスのひとたち来るよ、と言うと利用者さんうれしそうにします。終わってから「次はいつくるの?」と聞いてきます。Pさんは女の子たちが来るのを楽しみにしています」(C施設Cさん)。

c) 「みどりの服着ている人も先生いつもからんでくれますよね(そばで一緒に踊る)」(D施設Fさん)

2.1.4 『援助者・援助者の関係』

a) 施設Bのほうは職員、「いい運動になった」って言ってます。動きとかも普段つかわな

いところの筋肉を使うので。次までにきたえておこうかなって言ってます」(B施設Bさん)

b)「こうして(動画を)みるとおもしろいですね。この辺の先生方ががんばってますよね。おもしろくって、たのしいですよ。より楽しみがふえて、踊る機会がふえたって感じですかね」(B施設Bさん)

c)「“フォーチュンクッキー”は職員もおどれますしね」「職員はAさん(支援者でダンスビック担当者)の動きを見て踊れますし」(B施設Bさん)

d)「若い職員は参加しますが年配の人は利用者さんを連れて行こうとすると「その人は足が悪いからつれていなくていい」と言われたりします。積極的じゃないからやりずらいところはあります。キャリア20年くらいの人たちがそうだから10年くらいの人もそうなるっちゃう。支援者もだから心から楽しめないんです。担当者としては気を使ってしまいます。

その人は利用者さんへのタッチングとか手袋してやっています。素手でさわると「よくさわられるね」と言われる。でも園長が理解があるからいいですけど」(C施設Dさん)

2.2 「楽しい場の共有」

a) (筆者、動画で施設長が車椅子の利用者の手を取って音楽に合わせて動かしているのを見て)園長とか積極的にかかわってくれるからいいですよねえ」「そうなんです。そう思いますよね」(D施設Fさん)

2.3 「見えなかった・気づかなかった部分への気づき」

a) (発表会で「学園天国」が流れると飛び入りで最前列で踊り始めた利用者の動画を見て)「この方は自閉持ってる方で部屋から出たがらない方なんです。日中はほとんど部屋でTVゲームをやってる方なんです。部屋で音楽聴いていて、流行の音楽とか、CD注文してきて買っちゃうんです。ザードとか。その日はフェスということもあって、保護者の方も来ているということで出てこられたのでしょう。途中からサングラスを取り出して、でも値札がついるんですよ。残念ながら」(B施設Bさん)

b)「(AKBの「ヘビーローテーション」がかかると突然踊りだしたRさんを見て)感動しちゃいました。担当職員よんで「おどってるからきてください」って担当職員も「すごいねえ」って驚いていました。普段からじゃ想像できないです。はじめてみました。入所してまだ半年なんですけど、はじめてみました。・・・(ステージの)センター行っちゃったもん。今までずっと窓の外みてたのにね。あおどってるよ。ちゃんとまわってるよ。このビデオほしい。会議でみせてあげたい。本人にもみせてあげたい。ほんとはじめてみました。こんな姿。

ここに来る前はS学園にいたんですよ。3月から来て、ここではこういう曲聞くことあんまりないんで」(D施設Fさん)

c)「(動画でヤングマンを踊っている利用者を見て) ああいいですねえ。ああすごい乗ってる。あの子、ああ！ミニーちゃんのパーカー着てる人。私担当なんですけど彼女この歌

だいすきなんです。ああでもちゃんとおどってますねえ！ああうれしい」(D施設Fさん)

2.4 「絆の連鎖」

a) 「車椅子の年配の方 (Gさん)。子どもたちが休憩時間に踊っているときに自分で子どもたちのところに寄って行ってもでもだれもかかわらない。児童と成人は食事のときくらいですかね、一緒になるのは。席も別なので。音楽のなってるほうに行っちゃうんです。音の近くにいきたいんです。支援者とは話すんですけど、やっぱり簡単な会話のみで一方通行な会話になっちゃうんです。だれもかかわらない。子どもたちも、もともと関わりがあまりないので関わっていいのかとまどっているのかもしれないね」(A施設Aさん)

b) 「(動画を見ながら) Gさんの車椅子押してくれているのは成人施設のかたです」(B施設Bさん)

2.5 「賞賛と達成感」

a) 「(AKBの「ヘビーローテーション」がかかると突然踊りだしたRさんを見て) 感動しちゃいました。担当職員よんで「おどってるからきてください」って担当職員も「すごいねえ」って驚いていました。普段からじゃ想像できないです。はじめてみました。入所してまだ半年なんですけど、はじめてみました。・・・(ステージの) センター行っちゃったもん。今までずっと窓の外みてたのにね。あおどってるよ。ちゃんとまわってるよ。このビデオほしい。会議でみせてあげたい。本人にもみせてあげたい。ほんとにはじめてみました。こんな姿。

ここに来る前はS学園にいたんですよ。3月から来て、ここではこういう曲聞くことあんまりないんで」(D施設Fさん)

2.6 「般化と維持」

a) 施設Aのほうで軽度のお客様は次の練習が楽しみで、振り付けでわからないところは職員に聞いてきたりして。今までもアイドルのダンスとか好きな方でジャニーズとか一緒に練習しようといってきたり。フェス後も「つぎなにやるの」と楽しみにしている。そういう方、結構多いですね」(A施設Aさん)

b) 「何度か練習しました (ワークショップ以外に)。体育館で5回くらい。フェスタが近づいてから10日すぎってから夕方の時間のあるときとか」(A施設Aさん)

c) Gくん (支援者) 園の余興で“ヤングマン” やったんですよ。みんなと一緒に利用者さんも前に出してもらって。保護者も来る忘年会みたいな会で。(D施設Fさん)

d) (筆者) 「もっと頻繁にできたらいいですね。職員さんがやったらどうでしょう？ Gさんとか中心になって」「いいですね。施設A、Bとか行ってもいいですか？もし時間とかあれば利用者さんつれて行ったりとかできますか？冬の期間はあぶないですけど春になったら外出もかねて」(D施設Fさん)

2.7 「外との交流」

a) (筆者)「もっと頻繁にできたらいいですね。職員さんがやったらどうでしょう？Gさんとか中心になって」「いいですね。施設A、Bとか行ってもいいですか？もし時間とかあれば利用者さんつれて行ったりとかできますか？冬の期間はあぶないですけど春になったら外出もかねて」(D施設Fさん)

3 他者との関わりの特徴と変化 (参与観察、ビジュアル・データ、インタビューによる分析の統合)

3.1 「相互の関係」

他者との関わりは主に「利用児者・利用児者」「利用児者・援助者」「利用児者・スタッフ」「援助者・援助者」関係とした。

3.1.1 『利用児者・利用児者の関係』

身体が動かさない他者に対する思いやりある<向社会的行動>が複数回見られた(場面3)(場面11)(場面18)(場面24)(場面29)。場面29のSさんの関わり(タッピング)は自然でさりげない。

利用者のなかでも特に子どもたちはヨコ関係が比較的成立しており、休憩時間に音楽に合わせて自主的に踊るグループが見られた(場面11)(場面12)が、互いの会話はほとんどない。場面6で見られたGさんの接近行動と子どもたちの反応について援助者Aさんは次のように語ってくれた。「(Gさんは)支援者とは話すんですけど、やっぱり簡単な会話のみで一方通行な会話になっちゃうんです。だれもかかわらない。子どもたちも、もともと関わりがあまりないので関わっていいのかとまどっているのかもしれない」とのことで、日常的関わり少なさが影響しているようだ。

ASDのEさんは「ダンスは苦手だけどみんなが参加しているよって言うことで(今回参加した)。リズムに乗るのが難しいのは観ててわかりますね。触れられるの苦手なんですよね。「やめて」ってなっちゃって。みんなが同じ動きでやりましょうということなら大丈夫とおもいますけど」(援助者Aさん)とEさんについて教えてくれた。個別で接触する場合と集団で他者と接触することではEさんにとっては受け止め方がちがうようだ。

小さな単位(たとえば20人の集団の中での一組)で始まった両手をつないでの「シンクロダンス(スウィング)」がやがて周囲に波及してゆくことを<絆の連鎖>と呼ぶことにしたい(場面27)。次のエピソードがそれである。発表会で聴覚に障害のあるQさん(女性、50歳代)。ほぼまったく聞こえないが、曲が始まると両腕を上下させ力強く踊る。周囲の利用者の動きに合わせているよう(場面26)。

3.1.2 『利用児者・援助者の関係』

時系列で見ると、当初はときおり援助者の管理的関わりが見られたが(場面2)(場面5)(場面8)、援助者Bさんによれば以下のような理由があるようだ。「パソコンが好き

で勝手に（キーボードを）押しちゃうので youtube とか見ようとして、それをとめるために職員が誘導します（ワークショップでは音源としてパソコンを使用している）、「一番うしろの方は前の人の髪の毛とかひっぱっちゃうんですよ。以前に実習生の髪の毛とか引っ張っちゃったりしてた方なんで、それが怖くて支援者が一緒についてるか、目を離さないでいるしかない。大学生が目の前にいてどうしようどうしようとおもってました。職員じゃなくて実習生とか若い方をたたいたりするので、にやにやしているとこわくて。すごいですよ。髪の毛抜けちゃうくらい。今はだいぶ落ち着いてますけど1年前にもあったので」。施設Dにおいても何度も特定の利用者に他傷（つねる）を繰り返す利用者がいたが、援助者がつねる前に止めるように見守っている。

回数を重ねるにつれて、ある程度、利用者の主体的動きに寛容な関わりが見られるようになる（場面13）。また、ストレッチ、筋トレでは援助者が積極的に利用者をサポートする姿が目立つようになった＜肯定的変化＞。ステップの練習の際、援助者が利用者の隣、あるいは対面でサポートをしてほしいがなかなか見られない。ワークショップにおいてはステップ練習には15分と、他のプログラムよりの時間を多くとっている。援助者やスタッフの人数にも左右されるが、時間をかけてステップの練習をマンツーマンでじっくり行ってほしいからである。「共調動作（synchrony）」（柴 1993）はそれ自体がコミュニケーションである。そのコミュニケーションを快く、楽しいと感じる体験の積み重ねが対人相互関係能力を発達させることとなるのではないか。

一方、場面17のLさんのようにセッション中も徘徊するままにされている場合もある。Lさんの、ほんの一瞬でも他の利用者の動きにシンクロさせる場面もみられたことから、その場にいるということを嫌っているわけではないと推測される。

3.1.3 『利用児者・スタッフの関係』

時系列で変化を見てみると、第1回目は緊張し戸惑いが見られた利用児者だが（場面1）、回を重ねるごとにスタッフへの声かけや握手、ハイタッチを求めてくる行為などが増えてきた（場面9）。終わるとスタッフ全員のところに行き、一人ひとりに「ありがとうございました」と挨拶する利用児者もいる。

筆者らが訪問することを楽しみにされているようだ（場面12）。援助者Aさんは、インタビューで訪問したときの子どもたちの様子について次のように語ってくれた。「今日もダンスの話し合いがあるよって言うと、ダンスってことばに反応して、みんなやりたくてむずむずして、早くボブさん（筆者のこと）に会いたいって言ってます。今日は話し合いだからね、って言って話してきたんですけど」

Nさん（男性、20歳代）。今回初めての参加。最初は無表情で一点を見て固まっていたが、ダンスがはじまると少しずつ笑顔（ニヤッ）が見えてきて、サポーターに腕をとられて腕を動かしている。サポーターにアプローチするかどうか迷っている様子だ。急に走り出し男性サポーターのところへ笑顔で走って行きハグする。場面9のIさんの場合もス

タッフに積極的に働きかけては来ないが、スタッフと関わることを楽しいと感じていることが、部屋につれて帰ろうとする援助者への抵抗から推察される。場の雰囲気にも馴染むまでは時間が必要なのもかもしれない。

もっとも頻回で積極的なものは、特に男性利用者から女性スタッフへの関わりである。

援助者Cさんによると「今日ダンスのひとたち来るよ、と言うと利用者さんうれしそうにします。終わってから「次はいつくるの?」と聞いてきます。Pさんは女の子たちが来るのを楽しみにしています」特に男性利用者が学生たちの訪問を楽しみにしているとのこと。女性スタッフの膝が少し露出していただけで、力づくで膝に触ろうとする男性利用者も見られた。ワークショップでは同性のタッチを基本としているが異性にタッチする場合は握手、手をつなぐ、背中を押すなど自然発生的タッチに限ることとしている。

3.1.4 『援助者・援助者の関係』⁵⁾

援助者Dさんへのインタビューにおいて、年配の援助者と比較的若手の援助者間で温度差があることがわかった。施設CのDさんは次のように語ってくれた。「若い職員は参加しますが年配の人は利用者さんを連れて行こうとすると「その人は足が悪いからつれていなくていい」と言われたりします。積極的じゃないからやりづらいところはあります。キャリア20年くらいの人たちがそうだから10年くらいの人もそうっちゃう。支援者もだから心から楽しめないんです。担当者としては気を使ってしまいます」。年配者はワークショップに関心が薄く、若い職員は気を使ってしまうとのことである。Dさんは続けて次のように語っている。「(ワークショップに関心のない)あるベテランの支援者は利用者に触れるとき、ゴム手袋を使用してるんですよ。使用しない支援者に「よく触れるね」とか言うんです。「園長は理解があってそれが助かる」。当施設の園長は毎回ではないが、休日であっても出てこられ利用者と一緒に踊っている。

施設Bの援助者Bさんによると援助者が積極的に参加し、「いい運動になった」と言っています。動きとかも普段、使わないところの筋肉を使うので。次までにきたえておこうかなって言っています」「こうして(動画を)みるとおもしろいですね。この辺の先生方ががんばってますよね。おもしろくて、たのしいですよ。より楽しみがふえて、踊る機会がふえたって感じですかね」とワークショップを肯定的に捉えているようだ。施設Aと施設Bとでは筆者たちから見ても、場の風土(雰囲気)の違いを感じることもある。援助者が楽しんでいるかどうかはその表情で感じられる。

3.2 「楽しい場の共有」

援助者Aさんへのインタビューでは、場面10のEさんは重度のASDがあり、他者から触れることを嫌がり、パニックに至ることもあるが、フォークダンスなど全員で同じ動きをするという場面では拒否は少ないとのことだ。援助者Aさんは次のように語ってくれた。

「Eさん。ASDで高1の方で、このときはじめての参加しました。ダンスは苦手だけどみ

んなが参加しているよって言うことで。リズムに乗るのが難しいのは観ててわかりますね。触れられるの苦手なんですよね。「やめて」ってなっちゃって。みんなが同じ動きでやりましょうということなら大丈夫とおもいますけど。」**場面 4 の H さん**のように、行動や表情から喜んでいいのか、苦痛を感じているのかの判断が困難な場合がある。

援助者からの働きかけによって「並行ダンス（触れないダンス）」から「触れるダンス」へと変容していく場合がある。施設 D では施設長が車椅子の利用者に付き添い、背後から手や腕を曲に合わせて動かしている姿が見られた。

また、施設 C では、スタッフから一人の利用者に介入し、両手を取って「スウィング」「ストレッチ」などを行うと、さらに 3 人、5 人と周りの利用者となぎ輪になってスウィングしはじめた。利用者にも援助者、スタッフにもいつもより多くの笑顔が見られた。

施設 C では、男性援助者、両側の男性利用者と両手で手をつないで音楽に合わせてステップしている姿が見られた。

施設 A, B では、発表会の際に会場の利用者をステージに招くと何人も援助者が利用児者にステージ行くように促し、利用者と援助者が一緒に出てきて向き合ってスウィングをして踊る姿がみられた。

3.3 「見えなかった・気づかなかった部分への気づき」

場面 15、場面 28で見られるように、ダンスを通して普段の関わりで見られなかった利用児者の生き生きとした姿を発見することもある。援助者 E さんは次のようにそのときの気持ちを語ってくれた。「(AKB の「ヘビーローテーション」がかかると突然踊りだした R さんを見て) 感動しちゃいました。担当職員よんで「(R さんが) おどってるからきてください」って担当職員も「すごいねえ」って驚いていました。普段からじゃ想像できないです。はじめてみました。入所してまだ半年なんですけど、はじめてみました」「(動画でヤングマンを踊っている利用者を見て) ああいいですねえ。ああすごいってる。あの子、ああ！ミニーちゃんのパーカー着てる人。私担当なんですけど彼女この歌だいすきなんですよ。ああでもちゃんとおどってますねえ！ああうれしい」。

3.4 「絆の連鎖」

筆者らは約 60 分のワークショップ内に 2 回、5 分間の休憩を入れている。特に夏場はこまめな水分補給が必要なため、過重な運動を続けられないように配慮してのことだが、この休憩時間に利用児者がスタッフに話しかけることがほとんどだが、援助者と利用児者との交流する場面も見られる (**場面 6**) (**場面 7**) (**場面 19**) (**場面 21**) (**場面 22**)。

3.5 「賞賛と達成感」

発表会で飛び入りした男性 **K さん**、最前列でサングラスを取り出し顔にかけると最前列で元気にフリースタイルで踊る。この方について援助者 B さんは次のように語ってくれた。「この方は自閉持ってる方で部屋から出たがらない方なんです。日中はほとんど部屋

でTVゲームをやっている方なんです。部屋で音楽聴いていて、流行の音楽とか、CD注文してきて買っちゃうんです。ザードとか。その日はフェスということもあって、保護者の方も来ているということで出てこられたのでしょう。途中からサングラスを取り出して、でも値札がついるんですよ。残念ながら」

援助者Eさんは、AKBの「ヘビーローテーション」がかかると突然踊りだしたRさんを動画で見てそのときのEさんの様子を思い出し「感動しちゃいました。担当職員よんで「おどってるからきてください」って担当職員も「すごいねえ」って驚いていました。普段からじゃ想像できないです。はじめてみました。入所してまだ半年なんですけど、はじめてみました。・・・(ステージの)センター行っちゃったもん。今までずっと窓の外みってたのにね。あおどってるよ。ちゃんとまわってるよ。このビデオほしい。会議でみせてあげたい。本人にもみせてあげたい。ほんとにはじめてみました。こんな姿」と語ってくれた。Kさん、Rさんの突然の変化に援助者は驚くと同時に感動していた。今後の関わりで『肯定的変化』が期待できる。

3.6 「般化」と「維持」

施設Cでは9月9日の発表会から12月4日まで3ヶ月のブランクがあり、12月4日の際には参加者も若干減り、動きも鈍くなっているように感じた。

施設Dにおいては1年という長期のブランクがあるが第1回目(2014年)のセッション時の写真と比較するとやはり座っている利用者が増え、今回(2016)は「乗り」がよくなることがわかる。また、車椅子の利用児者が増えている。昨年まで立っていた方が今年は車椅子に乗っている。去年最前列で踊っていた方が座っていたが、後半、スタッフが彼の前に立ち、振り付けをリードすると、立ち上がって昨年のような元気な姿を見せてくれた。援助者Eさん「(筆者、動画を見ながら)みなさん、今回元気ないんじゃないですか?」「ないですね。思ったよりなんか……。立たせたりとかすればよかったですかね」月に2回、体操教室があり、歩行訓練も行っているとのこと。これらの場面、語りから、継続的、かつ日常的な活動が必要と思われたが援助者Eさんから以下の語りも聞くことができた。「Gくん(援助者)、園の余興で“ヤングマン”やったんですよ。みんなと一緒に利用者さんも前に出してもらって。保護者会も来る忘年会みたいな会で」。(筆者)「もっと頻繁にできたらいいですね。職員さんがやったらどうでしょう?Gさんとか中心になって」援助者Eさん「いいですね。施設A、Bとかに行ってもいいですか?もし時間とかあれば利用者さん連れて行ったりとかできますか?冬の期間はあぶないですけど春になったら外出もかねて」。援助者Eさんは、施設A、施設Bでのワークショップを見学して学び、施設Dに持ち帰り実践したいと語っていた。

施設Aではワークショップ以外に子どもたちが進んで練習する姿が見られたと援助者Aさんは語ってくれた。「施設Aのほうで軽度のお客様は次の練習が楽しみで、振り付けでわからないところは職員に聞いてきたりして。今までもアイドルのダンスとか好きな方で

ジャニーズとか一緒に練習しようといってきたり。フェス後も「つぎなにやるの」と楽しみにしている。そのいう方、結構多いですね」「何度か（子どもたちと）練習しました（ワークショップ以外に）。体育館で5回くらい。フェスタが近づいてから10日過ぎてから夕方の方の時間のあるときとか」

3.7 「外との交流」

援助者Dさんは日常的にダンス・ワークショップを施設で実施したいと他施設でのワークショップを見てみたいと語ってくれた。（筆者）「もっと頻繁にできたらいいですね。職員さんがやったらどうでしょう？Gさん（援助者）とか中心になって」さらにFさんは利用者の活動を豊かにする目的で利用者の他施設でのダンスを通しての交流ができないかと提案してくれた。「いいですね。施設A、Bとか行ってもいいですか？もし時間とかあれば利用者さんつれて行ったりとかできますか？冬の期間はあぶないですけど春になったら外出もかねて」。

IV. 結章

1. 分析から得られた結論

第3章の分析から得られた結論は以下の3点である。

ダンスビック・ワークショップにおけるそれぞれの概念の関係は図1に整理した。

1.1 ダンスビック・ワークショップという「相互の交流」を体験する「楽しい場の共有」は利用児者の対人相互関係における可能性を広げる。

ASDのEさんは「ダンスは苦手だけどみんなが参加しているよって言うことで（今回参加した）。リズムに乗るのが難しいのは観ててわかりますね。触れられるの苦手なんですよね。「やめて」ってなっちゃって。みんなが同じ動きでやりましょうということなら大丈夫とおもいますが」と援助者Aさんが語ったように、個別で接触する場合とプログラムの枠内で他者と接触する「相互の交流」ではEさんにとっては受け止め方がちがうようだ。最初は終始立ちつくしていたが、2曲目から、周囲の利用児者に合わせて瞬間的にはあるが手足を動かさず動作が見られた（場面10）。周囲の利用者にシンクロさせようとする行為は他者の存在を意識しはじめたということであろう。

発表会で聴覚に障害のあるQさん（女性、50歳代）は、聴覚に障害があり、ほぼまったく聞こえないが、曲が始まると周囲の利用者の動きに合わせているように両腕を上下させ力強く踊る（場面26）。その場の「相互の交流」すなわち『利用児者・利用児者の関係』『利用児者・援助者の関係』『利用児者・スタッフの関係』が醸し出す躍動感、楽しさといったものをQさんも受け止めていることがわかる。Eさん、Qさんともにダンスという他の利用者や援助者、スタッフとの「楽しい時間の共有」によってエンパワーされ、場の流れに自ら溶け込もうとする意志が確認できた。ダンスビック・ワークショップ（以

下ワークショップ) という「楽しい場の共有」によって、以上のことから、見えなかった・気づけなかった利用児者の可能性が表出されたことが確認できた。

「楽しい場の共有」のためには選曲はきわめて重要であることが分かった。特に利用児者が日常的に歌番組などで見たり聞いている曲を選曲すると強い動機付けになる。「絆の連鎖」の一つである休憩時間に施設Aの中学生男子Uくんと同学年の子どもたちは自分たちで集まって踊り始める。Uくんが「三代目かけて」というので「RYUSEI」(J soul brothers) を流すと子どもたちが踊り始める。音楽やダンスを通して他者と共通の活動に自主的に取り組むことが可能であることが明らかにできた。

また、「絆の連鎖」はダンスを踊っているときだけではなく普段気づかない場面でも可能であることが明らかになった。

直接的な活発な他者との「絆の連鎖」としてはダンス活動中より、むしろ休憩時間や日常の生活場面が挙げられる。筆者らはワークショップ中に2回、5分間の休憩(リラックス)時間を設けているが、特に夏場などは、高齢の利用者もいるので、こまめな水分補給は欠かせない。その時間に利用児者と主にスタッフとの交流が盛んに行われ、また、援助者と利用者との交流もみられる(場面22)。

同じ建物にある施設A、施設Bの利用児者の交流もほとんどないとのことだが(int(1)-a))、ワークショップの時間が、短い交流の場となる可能性はある。その場を活用する援助者、スタッフの意図的な関わりが求められてくるだろう。一方、日常生活では見られない利用児者同士の自然発生的<向社会的行動>が発生することもわかった(場面29)。

ASD児者の場合、たとえばダウン症児者に比べると参加度合いが低く、ステップができなかったり、身体の一部だけを動かすに留まったり、場合によっては、歩き回ったり、そこに居るだけということもあった(場面10)。しかし、堀内が言うように「自分と他者との間で時間・空間・雰囲気共有し、互いの存在を認め、力を引き出し、そこに居る人や出来事を受け入れる人と人とのありようをさす」いわゆる「磁場」⁶⁾が生成し、周囲のメンバーが放つ躍動感や楽しさのうねり、「絆の連鎖」のなかに身を置くこともまた、メンバー相互における大切な触れ合う関わりと説明することが可能である。狐塚・茅野(2008)はASD児者への4回のセッションでの事例研究を行い、身体表現的な関わり、身体接触を意識した関わりがASD児のコミュニケーション形成に有効であると述べている。また、茅野(2012:184)は知的障害児を対象としたダンス・プログラムによる実践を行い、友達や教師とのふれあいのときに、子どもたちにプラス表情が多く見られることからダンス・プログラムが「コミュニケーション能力の向上や人間関係の形成につながる」と述べている。

施設A,Bの発表会において、踊り終わった利用児者に会場から大きな拍手と賞賛の声がかけられ、それに応える利用児者の姿が見られた。「賞賛と達成感」を得ることで彼らの自己効力感、生きる力の醸成につながっていくだろう。

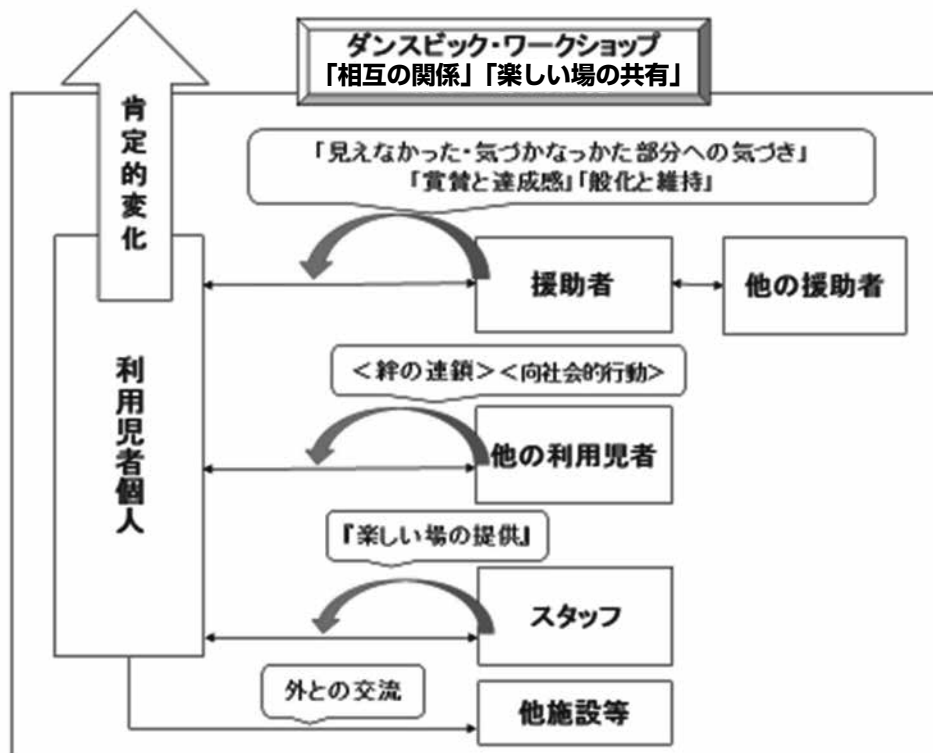


図1 ダンスビック・ワークショップにおける利用者他者との相互関係に及ぼす影響と変化

1.2 ダンスビック・ワークショップを通しての利用者の「見えなかった、気づかなかった部分への気づき」は援助者の関わりにより『肯定的変化』をもたらす。

場面 15、場面 28 で見られるように、ダンスビック・ワークショップ（以下ワークショップ）を通して普段の関わりで見られなかった利用者の生き生きとした姿を発見することがある。援助者 E さんは次のようにそのときの気持ちを語ってくれた。「(AKB の「ヘビーローテーション」がかかると突然踊りだした R さんを見て) 感動しちゃいました。担当職員よんで「おどってるからきてください」って担当職員も「すごいねえ」って驚いてい

ました。普段からじゃ想像できないです。はじめてみました。入所してまだ半年なんですけど、はじめてみました」「(動画でヤングマンを踊っている利用者を見て) ああいいですねえ。ああすごいってる。あの子、ああ！ ミニーちゃんのパーカー着てる人。私担当なんですけど彼女この歌だいすきなんですよ。ああでもちゃんとおどってますねえ！ ああうれしい。今回のワークショップの実践を通して、利用者の「見えなかった、気づかなかった部分への気づき」は援助者に利用者に対する肯定的評価を抱かせ、『利用者・援助者間の関係』に『肯定的変化』をもたらすとの仮説を持つにいたった。施設 D では施

設長が車椅子の利用者に付き添い、背後から手や腕を曲に合わせて動かしている姿が見られたり（場面 30）、施設 A では、1 回目のワークショップでは利用児者が勝手に歩き出すともとの位置に戻っていた援助者が見られたが（場面 2）、4 回目には、利用児者が勝手に歩き出すとその後をついて行き、利用児者が立ち止まった場所で向かい合い、両手をつないでリズムを取る援助者の姿が見られるようになった（場面 13）。「シンクロダンス」を通して利用児者の新鮮な姿に触れることによって、援助者自身が自らの中に新しい関わり方を見出してゆくのもかもしれない。

その後の E さんや施設 D の援助者の変化までは今回の調査では追えていない。年単位での追跡調査が必要であるので今後も継続して追跡していきたい。

加えて他者からの「賞賛と達成感」が利用者の気持ちに変化をもたらすのではないかとの仮説も与えられた。今後の課題である。

利用者と踊る時間の共有から触発された援助者からの働きかけによって「並行ダンス（触れないダンス）」から「触れるダンス」へと変容していく場合がある。

また、施設 C では、並行ダンス中にスタッフの一人から一人の利用者に介入し、両手を取って「スウィング」「ストレッチ」などを行うと、さらに 3 人、5 人と周りの利用者へと手をつなぎ輪になってスウィングしはじめた。利用者にも援助者、スタッフにもいつもより多くの笑顔が見られた。援助者からのアプローチによって、積極的に他者と関わろうとする利用児者の意志を導き出すのであろう（場面 26）。

3. ダンスビック・ワークショップの日常への「般化と維持」が対人関係の変化をもたらす

ダンスビック・ワークショップ（以下ワークショップ）が 1 ヶ月に 1 回にとどまるのではなく、日常的活動として施設内に「般化と維持」することが、対人関係の変化をもたらすには重要な取り組みであることはワークショップを待ち望む利用児者の声や、施設 A の担当援助者から、毎月実施してほしい、との要望があったことから明らかである。加藤は「般化と維持」を次のように説明している。「ターゲット行動が形成された後に、この行動が指導以外の場面、指導者以外の人、指導で直接形成した行動以外のコミュニケーション行動へ移行したり、波及したり、また、指導終了後も長期的に維持することが期待される」（加藤 1997:97-98）。加藤の言う「ターゲット行動」をワークショップという大きな括りで解釈した。指導以外の場面、すなわち施設内のクラブや余暇に指導者以外の人、すなわち施設の援助者によって、利用児者のニーズに沿った形で実施され、かつ維持されていく、長期的に取り組むことである。そのためにはワークショップに参加する援助者がいずれ利用児者や援助者のリーダーとなり施設内で実践していくとの意識を持ってワークショップに参加していただきたいと考える。

『援助者・援助者の関係』は「般化と維持」が施設に定着するかどうかに少なからず影

響を与えることが今回のインタビューで明らかになった。「若い職員は参加しますが年配の人は利用者さんを連れて行こうとすると『その人は足が悪いからつれていなくていい』と言われてたりします。積極的じゃないからやりづらいところはあります。キャリア 20 年くらいの人たちがそうだから 10 年くらいの人もそうなる。支援者もだから心から楽しめないんです。担当者としては気を使ってしまいます」とEさんが語ったように、一部の援助者の無関心や消極的関わりが、積極的にダンスを通して利用児者と関わろうとする援助者の意欲をそいでしまうことがある。外部の者であるスタッフに与えられた役割として、その場を楽しい場とするための意図的働きかけ（元気な対応、笑顔、語りかけなど）によって「楽しい場の提供」に努めることがあることが明確になった。

「シンクロダンス」の第一の目的は利用児者・援助者ともに他者との肯定的関わりを形成し、育てることである。しかも、可能な限り彼らの世界を尊重する、彼らの世界に援助者のほうから、まずお邪魔させていただくという姿勢を尊重する。

「シンクロダンス」の実践により、ワークショップのような楽しみや発表会などの目標ができ、援助者と安心できる温かい関係を築くことで利用児者の生活が豊かになる。その利用児者の変化にともなって、援助者自身も変化していく、ダンスが、その一手段となりえるということが本研究によって明らかになった。

施設Aの子どもたちはワークショップを楽しみにしてくれており（場面 12）、来年の発表会に何を踊るのか今から楽しみにしているとのことである（int5）-a）。練習をしたいという子どもたちに応える援助者の姿も評価できる。その意味で本研究において、「シンクロダンス」が利用児者と援助者の対人関係において『肯定的変化』を及ぼす効果があり、具体的「シンクロダンス」のプログラムを構築し、ワークショップのあり方について検証するとの目的も達成できたと考える。

本研究によって、利用児者がダンスに主体的に取り組むことでエンパワーされ、子どもたちの能動的な活動に積極的に応える援助者の存在は、施設の風土そのものを明るく活気あるものに変えてゆくであろうことを筆者は確信した。さらに言えばその安心できる温かい風土は虐待の発生を予防するひとつのツールとして活用可能であることも明らかになった。

本研究を進める中で援助者間の関係の視点や「外との交流」について、活動の「般化と維持」など、これまで気づかなかった課題を発見することができたことは大きな収穫であった。しかし、本格的にワークショップに取り組み始めて未だ9ヶ月に過ぎない。特に本稿では並行ダンス（触れないダンス）における「個別セッション」、触れる関わりを取り入れた集団セッションの臨床事例がきわめて希少であると認めざるを得ない（筆者がワークショップにおいて実践した数例に過ぎない）。よって、今後、援助者の理解、協力を得たうえでさらに臨床事例を積み重ねていくことが求められてくるだろう。筆者らは今後もワークショップを継続して実施してゆくつもりである。

謝辞

明星大学教授である垣内先生には特に研究手法について貴重なご指摘をいただき、筆者の手法の抜本的問題点に気づかせていただき大変助かった。ここで感謝申し上げたい。

最後にワークショップで関わってきた、これからも関わっていくであろう施設の利用者さんたち、援助者の皆様に心から感謝申し上げる。

註釈

註1) 1906年、ヘンリー・デールによって発見されたホルモンで、出産時の子宮の収縮運動や射乳を促進することがわかったが、その後、中枢神経系内で神経伝達物質としても働くことが分かり、他者との絆を作りたいとの思いや愛着を抱かせる働きがあることが分かった。触れることがオキシトシンの働きを促進すると言われている。

註2) : 1957年には、ロッキンチェアが正式な育児項目とされているリヴァーサイド病院に看護援助会からロッキングチェアがクリスマスプレゼントとして贈られた (Montagu 邦訳書 1977:131)。

註3) : 筆者は筆者以外のスタッフ (登録 25 名、毎回 2～3 名が参加) とワークショップを実施しているが、ワークショップ後に動画を見ながらのシェアリングを行っており、その場でスタッフからの感想、意見、疑問などを集約している。休憩時間に利用児者と交わした会話やビデオカメラの視界以外の出来事について把握することができる。

註4) : ロータッチ・ハイタッチは他害・他傷行為のある方には用いないほうが良い。たたく感触に固執することもあり得るからである。その場合は、手と手を合わせる行為を繰り返す。(図 8)

註5) : 『援助者・援助者の関係』においては直接利用児者との相互関係は存在しないが、間接的に『利用児者・援助者の関係』の相互関係に影響を及ぼすことがあり得るので、相互関係の一つとして取り上げた。

註6) : 堀内は「磁場」を次のように定義している。「自分と他者との間で時間・空間・雰囲気共有し、互いの存在を認め、力を引き出し、そこに居る人や出来事を受け入れる人と人とのありようをさす」

引用・参考文献

- Alvin,Juliette(1978)*Music Therapy for the Autistic Child*.Oxford University Press.
(=1982 山松資文・堀信一郎訳『自閉症児のための音楽療法』音楽之友社.)
- Creswell,John W(2003)*Research Design Qualitative,Quantitative,and Mixed Methods Approaches Second Edition*,Sage Publications,Inc. (=2007. 操華子・森岡崇訳『研究デザイン～質的・量的・そしてミックス法～』日本看護協会出版会.)
- Field,T.,C.Sander,and J.Nadal(2001)*Children with autism display more social behaviors after respeated imitation sessions* The National Autistic Society,Vol(3) 317-323.
- Frostig,Marianne(1970)*Movement Education: Theory and Practice*,Follett Publishing Company,a division of Follett Corporation. (=2007. 小林芳文訳『フロスティックのムーブメント教育・療法～理論と実際～』日本文化科学社.
- Iacoboni,Marco(2008) *Mirroring People:The New Science of How We Connect with Others*,Marco Iacoboni. (=2011.塩原通緒訳『ミラーニューロンの発見ー「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学.』早川書房.)
- 堀内園子 (2010)「認知症ケアの専門性～デイケア看護師による認知症高齢者の「脈を掘り当てる関わり」と「磁場」の形成～」所収：日本看護研究学会雑誌 vol.33 No.2.
- 市川和彦、木村淳也 (2016;A)『施設内暴力ー利用者からの暴力への理解と対応ー』誠信書房.
- 伊藤美智子 (2014)「知的障害者とその家族をメンバーとするダンスグループの活動に関する質的研究」所収：『日本女子体育連盟学研究』第30号.
- 加藤哲文 (1997)「コミュニケーション行動を形成するための基礎的・応用的指導技法」所収：小林重雄監修『応用行動分析学入門～障害児者のコミュニケーション行動の実現を目指す～』学苑社.
- 茅野理子 (2012)「知的障害教育におけるダンスプログラムの実践事例」所収：『教育実践総合センター紀要』宇都宮大学教育学部,第35号.
- 狐塚登喜枝・茅野理子 (2008)「自閉症児へのダンスセラピー的アプローチに関する事例研究」所収：『教育実践総合センター紀要』宇都宮大学教育学部,第31号.
- 小林芳文、大橋さつき、飯村敦子 (2014)『発達障がい児の育成・支援とムーブメント教育』大修館書店,

- 菊池貴美子 (2004) 『NHK 趣味悠々 レッツフィットエアロビック』 日本放送協会・日本放送出版協会.
- Lefco,Helen(1974)*Dance Therapy*,Helen lefco. (=1994. 平井タカネ監修『ダンスセラピー～グループセッションのダイナミクス～』 創元者.)
- 三隅治雄 (2002) 『歴史文化ライブラリー142 踊りの宇宙～日本の民族芸能～』 吉川弘文館.
- Moberg,Kerstin Uvnas(2000)*Lugn och Beroring:The Oxytocin Factor*, Kerstin Uvnas Moberg and Natur och Kultur.(=2008.瀬尾智子・谷垣暁美訳『オキシトシンー私たちのからだがつくる安らぎの物質』 晶文社.)
- Montagu,Ashley(1971)*Touching:The Human Significance of Skin*,Columbia University Press. (=1977.佐藤信行・佐藤方代訳『タッチングー親と子のふれあい』 平凡社.)
- 野田療 (2009) 『脳と心を癒す～音楽運動療法入門～』 工作舎, pp. 13-16.
- O.Gorman,Gerald(1970) *The Nature of Childhood Autism*,Butterworth & Co.,(Publishrs)Ltd. (=1970. 白橋宏一郎・大山正博・川口みさ子訳:『子どもの自閉症』 北望社.)
- 小田博志 (2010) 『エスノグラフィー入門～<現場>を質的研究する～』 春秋者.)
- 大橋さつき (2002) 「自閉症児を対象としたダンス・ムーブメントの試み」 所収『舞踏学』 Vol, 2002, No25, 舞踏学会.
- 大橋さつき (2008) 『特別支援教育・体育に活かすダンスムーブメントー「共創力」を育み合うムーブメント教育の理論と実際ー』 明治図書.
- Rohman,U.H & Hartmann,Hellmut(1988)*Autoaggression:Grundlagen und Behandlungsmoglichkeiten*, verlag modernes lemen,Borgmann KG.(=1998. 三原博光訳『自傷行動の理解と治療～自閉症、知的障害児(者)のために～』 岩崎学術出版社.
- 坂本龍生 (1989) 「運動発達の特徴」 所収: 全日本特殊教育研究連盟編『自閉児指導のすべて』 日本文化科学社.
- 崎山ゆかり (2007) 『タッチングと心理療法～ダンスセラピーの可能性～』 創元社
- 柴眞理子 (1993) 『身体表現～からだ・感じて・生きる～』 東京書籍.
- Stern,Daniel N(1985) *The Interpersonal World of the Infant:A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*,Basic Books, Inc. (=1989. 小此木啓

吾・丸田俊彦監訳『乳児の対人世界～理論編～』岩崎学術出版社.)

Takahashi,Toku.Gribovskaja,Rupp and Babygirija(2013)*Physiology of love:Role of Oxytocin in Human Relationships,Stress Response and Health*,Nova Science Publishers.Inc(New York) (=2014.市谷敏訳『人は愛することで健康になれるー愛のホルモン・オキシトシン』知道出版.)

Temple Gradin(1995)*Thinking in Picture*, Temple Gradin. (=1997. カニングハム久子訳『自閉症の才能開発～自閉症と天才をつなぐ環～』学習研究社.)

Tinbergen, Niko and Tinbergen,Elisabeth (1984)*Autistic Children:new hope for a cure*,Verlagsbuchhandlung Paul Parey. (=1987. 田口恒夫訳『改訂 自閉症・治癒への道～文明社会への動物行動学的アプローチ～』新書館, 85.)

山田正利 (1989,A)「人とのかかわり」所収『自閉児指導のすべて』全日本特殊教育研究連盟編.

山田正利 (1989,B)「遊び」所収『自閉児指導のすべて』全日本特殊教育研究連盟編.

山松質文 (1996)「自閉症児とのふれあいー山松方式によるミュージック・セラピーー」所収：櫻林仁監修「音楽療法研究ー第一線ーからの報告」, 音楽の友社.